



りんご
明治40年頃の津田苹果園

開拓使の東京官園から移植

ヨーロッパのリンゴが日本に入ってきたのは鎌倉時代だが、栽培が定着したのは明治に入ってからである。

明治4年(1871)9月、開拓使はケブロン アイデアで東京に第一、第二、第三の官園(通称・東京官園)を設け、アメリカから輸入した果樹を青山南町の第一号官園に移植した。

明治6年10月、開拓使札幌本庁舎が完成し、90,816坪(約30.0ha)の広い敷地のうちの58,529坪(約19.3ha)が果樹園となり、明治7年から8年にかけて東京官園から梅・サクランボ・桃・スモモ・ナシ・アンズ・リンゴなど4,700株を移植した。

次いで開拓使は明治8年から20年までに無償・有償で671,600本の苗木を開拓者に配布した。

白石村にも明治8年から14年まで毎年果樹苗木が配布され、この7年間にナシ9,304本、ブドウ6,473本、リンゴ4,057本、モモ2,479本、スモモ1,085本、サクランボ920本、梅730本、アンズ426本、合計25,474本が配布されている。

リンゴだけをみると、明治8年387本、9年690本、10年727本、11年483本、12年600本、13年600本、14年570本

となっている。当時の白石村の人口は明治8年389人(98戸)、明治13年452人(98戸)と、この間変わっていないので、単純に平均すると毎年1戸あたり数本の配布ということになる。

明治8年に植えた苗が5年後に実をつけるものがあったが、その後に植えたものを含め、10,000本のうち実をつけなかったものが8,805本(88.05%)もあったと報告しているから、テスト栽培とはいえかなり厳しい結果だ。

りんご 津田苹果園が良質のリンゴを生産

津田教助は山口県出身で、明治14年(1881)に開拓使の官吏として札幌に来住した。15年開拓使の廃止に伴い札幌県に転任したが、同年末に退職して南1条西2丁目に聚文堂という書店を開き、店は繁盛したという。

津田は明治19年(1886)、白石村に4町歩の土地を購入し、リンゴの栽培を始めた。明治24年から果樹園の経営に専念し、園芸家として名を知られるようになった。

明治40年(1907)頃には3,500本・200町歩に達し、共進会などにリンゴを出品して、しばしば優賞を受けた。

郷土史「南郷」によれば、「明治21年4月、小澤治三八氏、札幌偕楽園より苗木20本を購入試作したるに始まる」の

開拓使が配布した苗から リンゴ栽培は白石一帯に広がった





地形図に果樹園の記号のある範囲（大正5年の5万分の1地形図）



昭和23年頃撮影の米軍航空写真では国道12号から旧横丁通にかけてリンゴ園が写っていた

が続き、課税はきつかったがリンゴ農家は助かった。

昭和25年に白石村は札幌市と合併した。札幌市の発展はめざましく、白石も区画整理が行われ、急速に宅地化が進んだ。そしてリンゴ園も宅地化してリンゴ農家が少なくなったため、白石果樹組合も昭和35年に解散した。

（鈴木祥寛）

記録がある。また、明治30年代に入ると「藤原慶太郎氏は、約6反歩を經營し、札幌市街に出荷し、部落林檎園の始祖なり」と書かれている。

札幌に北海道果樹協会を設立

明治20年頃から北海道の果物も販路が著しく拡張されて栽培熱が急に高まり、栽培面積も急増した。その栽培の中心は札幌区を主とする札幌近隣の町村だった。

明治24年(1891)10月、専門家や栽培者が集まって札幌に北海道果樹協会が設立された。全国で初めての果樹組合であり、会報の発行、講演会・品評会の開催、販路の調査などを行い、本道の果樹栽培に貢献した。

同協会は、明治25年11月、札幌で第1回果実品評会を開催した。これは全道で初めての果実品評会である。このときの一等賞の受賞者は次のとおりである。

リンゴ（1号）札幌村 橋 仁
 "（7号）南6西4 阿部隆明
 "（49号）山鼻村 水原寅蔵
 "（6号）北4西7 勸農協会
 "（7号）山鼻村 水原寅蔵
 ナシ 上手稲村 小島尚友

これを見ても当時のリンゴ栽培の中心地がわかる。明治27年に果樹生産に関する完全な統計調査が行われたが、札幌区及び札幌郡の果樹株数は全道の半分以上を占め、果実の生産では8割を超えている。そのうちでリンゴが全生産額の8割を占めている。

リンゴをロシアなどに輸出

北海道のリンゴの初輸出は、明治27年に函館港から清国（今の中華人民共和国）向けの67.8キログラムである。

輸出は年毎に増え、明治36年(1903)には1,108トン・120,388円と飛躍的に伸びた。これは全国のこの年のリンゴ輸出量の93.2%を占めていた。37年から38年の間は日露戦争の影響で大きく落ち込んだが39年には回復し、1,386トン・208,570円と、全国シェアの78.2%を占めた。道産リンゴの輸出先のほとんどがアジアのロシア領向けで、小樽港からウラジオストック港を経てハバロフスク、ハルビンなどへ送られた。

病虫害との戦い続く

こうして果樹栽培は需要の拡大に支えられ、数量・価格ともに著しく伸びた。明治30年以降、しばらくの間は北海道リンゴという名称で全国的な名声を得た。

しかし明治20年前後からカイガラムシ、ワタムシ、明治30年代にはシンクイムシ、ふらん病が広がり、リンゴ市場における評判は急落し、栽培者に多大な損失を与えた。こうして廃園するリンゴ園が続出した。

好況のうちに都市化が進む

昭和8年(1933)に、東札幌、白石中央、本通、南郷、大谷地、厚別のリンゴ栽培農家20数人が集まって白石果樹組合をつくり、相互に研究し合った。リンゴは販売価格が高く、畑や水田に比べ4倍にもなった。戦後の混迷の時期でも好況

リンゴの開拓使番号と通称番号

品 種 名	開拓使番号	通称
赤龍（あかりゅう）	1号	1号
宝玉（ほうぎょく）	3号	赤3号
紅玉（こうぎょく）	21号	6号
紅紋（べにしぼり）	30号	12号
緋之衣（ひのころも）	31号	19号
国光（こっこう）	34号	49号
倭錦（わにしき）	46号	阿部7号